

本書は、NOT for Sale: The Return of the Global Slave Trade and How We Can Fight Itが翻訳されたものである。第1版は2007年に書かれ、その後、2010年に改訂版が出版された。これは改訂版の翻訳であるが、英語改訂版で部分的に省略された初版第1章も収録されている。

< NOT for Sale >は、2007年2月に正式に発足したキャンペーンの名称で、NFSと略して用いられることが多い。著者バッドストーンと友人2人で始まったキャンペーンは「私は売り物ではない。あなたも売り物ではない。だれひとりとして、売り物にされてはならない。」という信念をもって活動している。世界には3,000万人（その8割が女性で、5割が子ども）と推計される「奴隷」がいて、今や世界規模で組織された「人身売買（ヒューマン・トラフィッキング）」が横行し、しかもその事実は知られにくいし、知られていない。身近なところにいるその被害者たちに人々の目は向いてはいない。

本書の序章は、「人身売買は暗がりにはびこるものです。しかも、自分とは無関係の場所で、無関係の他人に起こることだと考えがちです。けれども実はそうではない。人身売買という犯罪は地球上すべての国がかかわっており、わが国も例外ではありません。」という、ヒラリー・クリントン米務長官のことばから始まる。身近にあるこの事態を個々人が知ることは、この問題を解決に向かわせるもっとも効果的な第一歩であり、この事実を知った個人の行動が、「現代の奴隷」を解放させることになると、バッドストーンは言う。

「あらゆる年齢の男女、そして少年少女たちが、ネパールの絨毯織物小屋で過酷な労働を強いられ、ローマの売春宿で体を売られ、パキスタンの採石場で岩を削られ、アフリカの密林で戦争をさせられ、カリフォルニアの縫製工場で服を縫わされている。」という事実をバッドストーンが知ったのは、パークレーで起きた悲惨な事故がきっかけだった。

換気の悪いアパートに住んでいた17歳と15歳の姉妹が、一酸化炭素中毒で意識不明になった。それを見つけたルームメイトは、雇い主に連絡。雇い主は彼女たちを絨毯に巻いて運び出そうとし、抵抗するルームメイトとともにヴァンで連れ出そうとした。偶然その様子に遭遇して阻止しようとした通行人が警察に通報し、奴隷売買人（人身売買・取引）の存在や組織が暴露されることになった。そして、バッドストーンは、よく食事に行っていた近所のインド料理店で働く従業員が、そうした人身取引の被害者、「奴隷」だったことを知る。

2003年9月の国連総会でジョージ・ブッシュ米国大統領（当時）は「毎年、80万から90万の人間が、世界じゅうの国境を越えて買われ、売られ、運ばれている。いかなる目的であれ、人間の売買をわれわれの時代にはびこらせてはならない」と訴え、2002年、EUはすべての加盟国に対して、国境を越えた反人身売買措置の効果的な促進を目的とする「パレルモ議定書」の実行を求めている。

そうした人身売買・取引は、今や組織化され、グローバル化され、ネットワーク化されている。人間をリクルート（親戚や顔見知りというケースは多い）し送り出す国、仲介する組織／

業者、受け入れ国がそれぞれ役割分担した動きを持つ。日本はいまでもなく受け入れ国の一つで、日本にはタイやコロンビア、東欧から人が送り込まれている。最大の原因は経済格差で、貧しい人が騙されて売られてしまう。国内でも同じ状況がある。バッドストーンは言う。「貧困と社会的不平等が蔓延しているため、奴隷候補者の層は確実に海よりも深くなっている。貧窮にあえぐ親は自ら進んでわが子を売るか、あるいは奴隷商人の言葉に簡単に騙されて、息子や娘の命をその手に譲り渡してしまう。基盤が脆弱な共同体に暮らす若い娘たちは、たとえ遠い場所であっても、仕事の口があるなら喜んでリスクを冒そうとする。貧しい人々は、のちのち自由を奪われるとも知らずに、奴隷商人から借金をしてしまう。これらの道筋はすべて、疑うことの知らない予備軍の人々を、奴隷の供給チェーンに送り込んでいるのだ。」と。

バッドストーンは、本書を書くにあたり、アメリカ、メキシコ、中国、韓国、フィリピン、カンボジア、タイ、ペルー、インド、ウガンダ、南アフリカ、東欧諸国で、何百人の話を聞いた。その身の上話の共通性から、人身売買のメカニズムを読み取っている。本書では、そうした膨大な聞き取り調査を基盤に、個人のライフストーリーを語りながら、そうした被害者に直接関わって救い出そうとして活動する個人や団体の動きが、以下の順序で描かれている。

バッドストーンは、本書を書くにあたり、アメリカ、メキシコ、中国、韓国、フィリピン、カンボジア、タイ、ペルー、インド、ウガンダ、南アフリカ、東欧諸国で、何百人の話を聞いた。その身の上話の共通性から、人身売買のメカニズムを読み取っている。本書では、そうした膨大な聞き取り調査を基盤に、個人のライフストーリーを語りながら、そうした被害者に直接関わって救い出そうとして活動する個人や団体の動きが、以下の順序で描かれている。

序章 わが家の近所に奴隷がいた…

第1章 性産業の暗闇を照らすーカンボジア、タイ

第2章 債務労働者の鎖を断ち切るーインド

第3章 子ども兵士を救出するーウガンダ

第4章 性産業シンジケートに斬り込むーヨーロッパ

第5章 迷子たちをかくまうーペルー

第6章 現代の“地下鉄道”を創るーアメリカ

終章 奴隷取引に終止符を打つ

人間を売買し、過酷な労働を強いる「奴隷制度」など、今の世の中であるはずがないと思っている人にこそ、本書を読んでほしい。小島優・原由利子『世界中から人身売買がなくなりたいのはなぜ?』(合同出版、2010年、1300円)を合わせて読むと、人身売買の現状がより理解できる。

